

2020 京都橘大学

「地域連携型教育プログラム」 実績集

(2020年4月～2021年3月)



地域連携センター

Center for Regional Collaboration

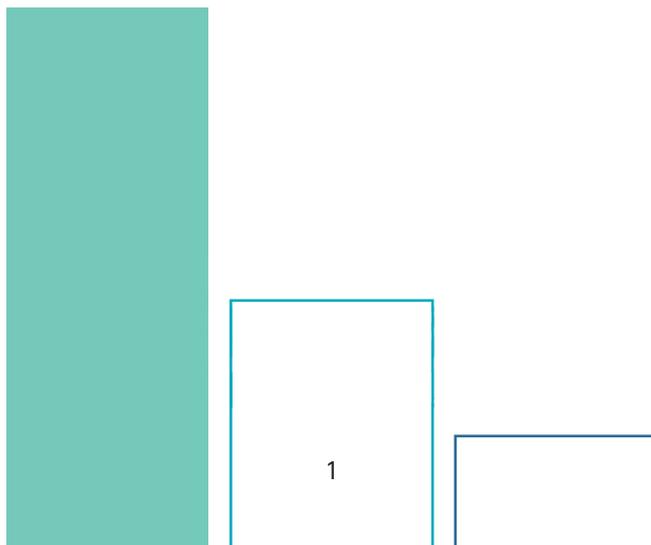




□ 目次：京都橘大学「地域連携型教育プログラム」実績集

I. はじめに	2
II. 2020～2023年度「学まち連携大学」促進事業 概観	4
III. 地域連携型教育プログラムの実績	5
実践例	
作業療法学科「地域包括ケアシステム演習」	6
京野菜を使った学生向けオリジナルレシピ集の研究開発	7
リモートによるオペレッタ（音楽劇）公演	8
書道コース学生団体 OSJ 橘の動画版書道プログラム	9
げん kids ★応援隊による「リモートお化け屋敷」の取り組み	10
やましなのWA ～心のこもった文通プロジェクト～	11
世界の人々を対象とした健康教育動画の配信	12
イオンタウン山科榎辻での来店者調査活動	13
駅ナカアートプロジェクトへの参加	14
榎辻駅「アートロードなぎつじ」に中臣遺跡出土土器を展示	15
学まちチャレンジ報告 with コロナの開催	16

I はじめに



はじめに



岡田 知 弘
地域連携センター長

コロナ禍のなかで

本書は、京都橘大学における 2020 年度の地域連携実績をまとめた報告書です。本年度は、当初から新型コロナウイルス感染症が広がり、地域の皆さんと連携することはもちろん、キャンパスのなかでの対面式の教育研究活動も前期の間はまったくできませんでした。後期に入って、少人数講義や演習については対面授業ができるようになりましたが、従来のように、地域の現場に教職員や学生が自由に出かけて、連携事業や調査活動を行うことは、大幅に自粛せざるをえない状況でした。

第二期「学まち連携大学」促進事業に採択と各種事業の開始

困難な状況下ではありましたが、今年度半ばに京都市の第二期「学まち連携大学」促進事業に採択されることになりました。本学は、すでに 2016～2019 年度において、第一期「学まち連携大学」促進事業に採択され、学生と教職員が一体となって地域のみなさんとの協同の取組みを展開してきましたが、その実績が認められ、2020 年度からは「山科・醍醐地域で『変化を楽しむ』地域連携型教育プログラム」というテーマで、同じく京都市山科区に立地している京都薬科大学との共同事業も行うことになりました。

新型コロナウイルスの影響を受けたものの、感染対策に注意をしながら、来年度以降の取組に備えて、各種事業を開始しました。例えば、地域連携の可視化をテーマとした「見える！！地域連携」プロジェクトでは、学生公募型地域連携活動助成事業の制度案作成、PROG テストの実施、卒業生インタビューの概要決定、作業療法学科による山科団地の活性化プログラムでのアンケート調査などを行いました。

また、京都薬科大学との連携による「区民に身近な大学へ」プロジェクトでは、共同公開講座の概要決定、共同学生団体の設立およびオンラインミーティングの実施、模擬患者バンク設立に向けた協議を開始しました。

さらに、コロナ禍による影響が今後も一定期間継続することを見越し、オンライン環境の整備、本事業の成果公開用特設ホームページの開設を行ったところです。

地域連携センターを中心にした今後の事業展開へのご協力を

また、この第二期「学まち連携大学」促進事業の推進主体になっているのが、本学地域連携センターです。本学は 2005 年には男女共学化とともに教学理念を「自立・共生・臨床の知」と再設定して、「臨床＝現場＝地域」から学び、地域と共生することを謳いました。そしてこの方針のもと、地域との連携機能をより一層発展させるために 2014 年 4 月に地域連携センターを開設いたしました。

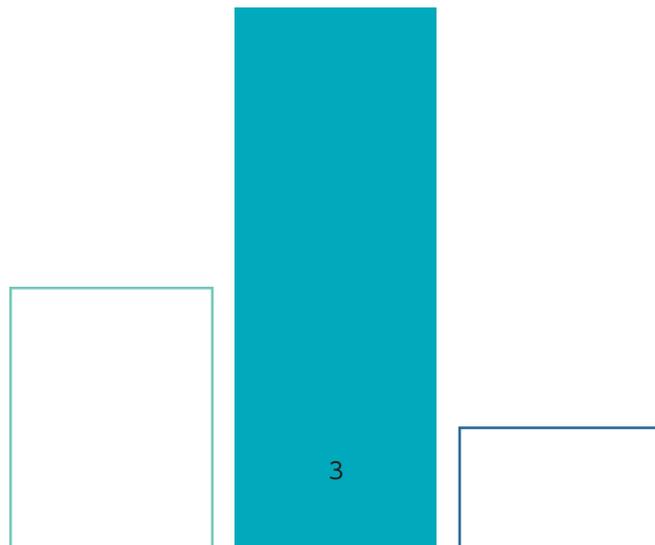
当センターとしては、今後、第二期「学まち連携大学」促進事業の推進にいつそう力を注ぐとともに、同事業以外の分野でも教職員や学生による多様な地域連携事業の展開と広報に努めていきたいと考えております。どうか、今まで以上に、本学の地域連携活動にご協力、ご支援をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

Ⅱ

2020～2023年度

「学まち連携大学」促進事業

概観



2020～2023年度

「学まち連携大学」促進事業

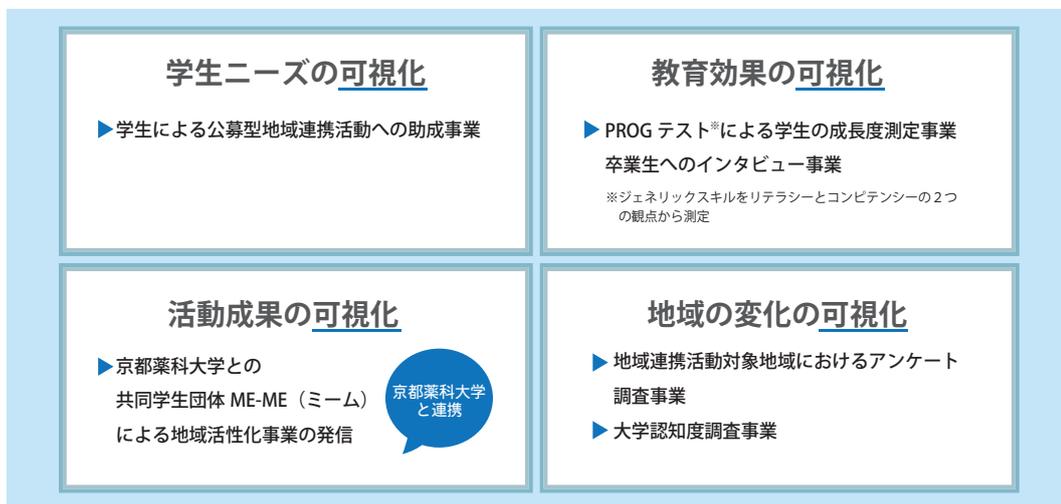
山科・醍醐地域で「変化を楽しむ」地域連携型教育プログラム

2020年度から2期目の採択を受け、新たなプログラムを展開しています。

「山科・醍醐地域で『変化を楽しむ』地域連携型教育プログラム」と題し、地域連携活動の可視化をテーマとした①「見える！！地域連携」プロジェクトと、京都薬科大学との連携による②「区民に身近な大学へ」プロジェクトの2つを始動させました。

①「見える！！地域連携」プロジェクト

地域連携活動を下記4つの視点で可視化（見える化）します。



②「区民に身近な大学へ」プロジェクト

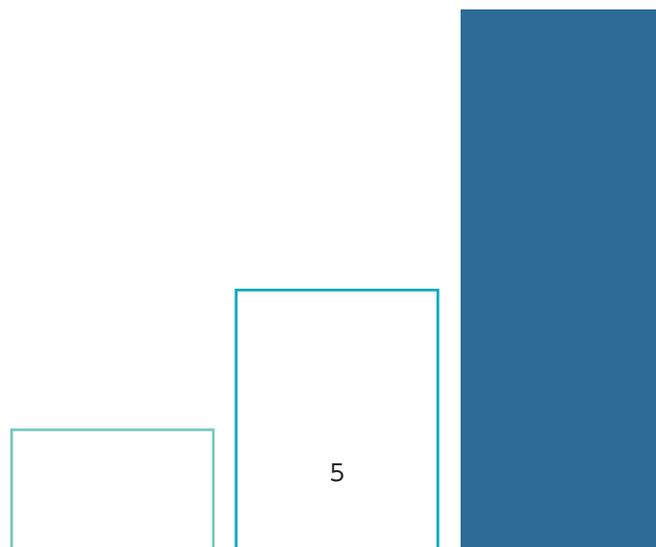
「地域貢献」と「学生教育」の観点から京都薬科大学と連携し、下記の取組を実施いたします。

市民向け 共同公開講座の実施 本学と京都薬科大学の教員が講師となり、市民向けの役立つ講座「京のやくたちばなしー健康で豊かに暮らすコツー」を開催します。	共同学生団体の 設立・活動の展開 本学と京都薬科大学の学生からなる共同学生団体 ME-ME ^{ミーム} を設立しました。今後、様々なイベントの実施を予定しています。	山科・醍醐地域 医療人養成 プラットフォーム(仮) 京都橘大学・京都薬科大学・地域の連携による、医療人の養成と地域活性化を目指します。
---	---	---

京都薬科大学との連携でより身近な大学へ

Ⅲ

地域連携型教育プログラムの実績



■ 地域連携型教育プログラムの実績

どんな時でもつながれる！学べる！

作業療法学科「地域包括ケアシステム演習」

健康科学部作業療法学科学生

地域包括ケアシステム演習という講義

作業療法学科の3年次後期に開講される「地域包括ケアシステム演習」は地域の様々な社会資源とつながり、地域課題を肌で感じ、具体的な支援方法を考える体験型講義です。今年度はコロナ禍という非常時において、実際に触れ合うことができない状況下でも、地域とつながりながら、できることを模索する取り組みを行いました。

2つのミッション

<ミッション1：東レ「トレファームラボ」の遠隔講義>

京都府相楽郡精華町にある、東レが運営する「トレファームラボ」は高齢者や障害者が活動できるビニールハウス農業を運営しています。レイズドベッド、水、肥料散布、ハウス内温度調整の自動化・遠隔操作など、その人の状況に応じた農業への参加の方法が工夫されており、多くのボランティアのサポートも入っています。今年度は、コロナ禍により、現地に行くことはできませんでしたが、東レ職員の方による遠隔での講義、高齢者施設の方々や発達障害の方達と実際の活動をみながら、双方向でコミュニケーションが取れるようにして講義を進めました。

<ミッション2：山科団地での健康イベント>

一昨年より、山科団地の活性化を目的に京都市と一緒に取り組んできました。昨年の調査の結果、世代間交流が団地内、特に高齢者のニーズとして高かったことから、団地内の集会所での健康教室を企画しました。学生が脳健康体操、体の健康体操をそれぞれ考え、現地で実施する予定でしたが、今年度は、大学と集会所をwebでつなぎ、学生と高齢者双方向でコミュニケーションをとりながら行いました。

教育的効果

作業療法 (Occupational Therapy) の Occupational の語源は Occupy (占有する、心を占める) です。作業療法は人の心のあり方と体の動き、生活の仕方との関係性を考え、人の健康増進や生活の不具合に関わっていきます。地域ではその個人の心のあり方が、生活や健康に大きく影響します。病院などと違い、治療の場ではなく生活の場だからです。今回ご紹介したように、心動かす仕掛けは地域に沢山あります。体験後、学生から以下のような気付き・学びの声がありました。

「農作業の工程がどのような人に活用できるか」、「身体の不自由な人が取り組む場合にどのような配慮が必要か」、「遠隔でも表情がわかり、こうした手段でつながることも可能なことがわかった」など。

健康的に、自分らしく生きるための手段を、病院や施設など限られた環境の中だけで模索するのではなく、広い視点に立ったものの考え方に学生が気付く機会となりました。また必要に迫られた中ではありますが、コロナ禍における「つながる」ための模索も、今後の地域支援の方法の一手段として学生にはインプットされたと思います。

どんな時でもつながれる、学べる。できることは沢山ある。

今回の企画を通して得た、関係機関の方々とのつながりや運営ノウハウを、上回生から下回生へ引継ぎ、次年度以降も継続していきたいと考えています。



東レ「トレファームラボ」での活動と遠隔による情報交換



山科団地と大学の双方向での歌や体操の様子



■ 地域連携型教育プログラムの実績

京都の伝統野菜の魅力再発見

京野菜を使った学生向けオリジナルレシピ集の研究開発

現代ビジネス学部都市環境デザイン学科 木下達文ゼミ

共同研究プロジェクトの概要

現代ビジネス学部都市環境デザイン学科の木下達文ゼミでは、卒業研究とは別に共同研究プロジェクトを実施しており、座学と実践学とをバランス良く学習させています。今回のテーマは、いくつかの事業企画の中からあまり学生が食べることのない京野菜を使ったオリジナルレシピを研究開発し、それを冊子化しました。企画の根底にあったのは「学生の食の乱れ」と「京都の伝統野菜に光を当てる」ということで、その過程で学生の食実態調査を行うと同時に、京野菜の研究と学生でも食べてみたくなるレシピを考案しました。

取り組みの経緯やねらい

本共同研究プロジェクトは、企画から制作までの研究実践活動を通じて、とくに学生に足りない社会人基礎力を向上させるとともに、実社会で役立つ基本的なビジネスの知識やノウハウを体験的に学ばせることです。学生が自らテーマを決め実施する方法をとっており、ゼロベースから企画・研究・制作を行うことから「クリエイティブ・ラーニング」と称しています。また、最終的な成果は、一般でも通用するレベルのクオリティを目指しており、社会的な評価を得られることも目標としています。

具体的な成果と実績

具体的には、まず基礎文献により食生活実態と京野菜（京の伝統野菜）の概要について学び、その後、学内でアンケート調査を実施するとともに、京野菜を使った料理の試作を行いました。また、学生たちがとくに意識したのは「一人暮らしの学生でも手軽に調理できること」と「野菜嫌いの学生でも京野菜に興味をもてるようなレシピ」であり、できるだけ多様な京野菜を使うことを心がけました。また、冊子には大学近くにどのような販売所があるかなども調査し、掲載しました。加えて、誌面レイアウトのクオリティを高める意味で、専門家からレクチャーを受けた上でデザインを行いました。コロナ禍で思うように事業を進めることができませんでしたが、最終的に冊子はPDF化を行い、また完成発表会はオンデマンド配信を行うなど、広く情報発信できる在り方を模索し、多くの困難を克服していくプロジェクトになりました。



完成したレシピ集



集合写真



レシピ集の誌面例



完成発表会の様子

■ 地域連携型教育プログラムの実績

コロナ禍だからこそ、つながりたい！

リモートによるオペレッタ(音楽劇)公演

発達教育学部児童教育学科保育内容演習(表現) 学生

取り組みの概要

2014年度から「保育内容演習(表現)」の授業の一環などで、児童教育学科の学生がオペレッタ(音楽劇)を近隣の保育園などで発表するという取り組みを行っています。子どもたちの生の反応に触れることで、毎年、学生自身のより深い学びにつながっています。コロナ禍で多くの地域連携活動を自粛せざるを得なかった今年度、新たな取り組みとして、大学と子ども園(保育園)をオンラインでつなぎ「双方向型でのオペレッタ公演」を企画し、前期(3回生・22名)は2園で3演目、後期(1回生・74名)は5園で6演目(8公演)の計11公演を成功させることができました。

取り組みのねらい

- ・ コロナ禍で制限されている「地域の子どもたちと大学生との交流事業」の新たな形を模索する。
- ・ 将来、教育・保育職を目指す大学生が自主的に「オペレッタ公演」を企画・準備することで、「自ら表現する力」「多様な表現の在り方に気づき、認める力」「一つの舞台を作り上げるために必要な見通す力」などを身につける。
- ・ ICTを活用した教育・保育方法について考察し、実践する。
- ・ コロナ禍で大幅に行事の機会が減った子どもたちに「生に近い」リアルな観劇体験の場を提供する。

コロナ禍での公演に向けて

「人前で話すのは苦手」「歌は恥ずかしい」など「自己表現」に苦手意識をもっている学生は非常に多く、ある程度の人間関係ができておりお互いの性格をよく知っている3回生(前期)でも初めは思い切って演じることができないというのが毎年の光景です。ましてや、今年の1回生は後期になって初めて顔を合わせた者ばかりで、11月中旬の活動開始当初はグループ内での遠慮(牽制?)からか、なかなか意見が出ず準備が思うように進まない状態が続いていました。肝心の劇についても、恥ずかしさからか動きも声も小さく、早口で自分のセリフを言うだけで後は棒立ちという学生が非常に多く見られました。そこで教員は「自分の役の性格を決める」という課題を出し「前の人のセリフであなたはどう思ったの?そして、どうしたいの?」という問いかけを何度も繰り返すことで、出演者同士の意思疎通を図ることにしました。また、学内リハーサルを試験的に相互のZoomで行い、他のグループに見せることで「伝えることの難しさ」を実感できるように工夫しました。

そして本番当日。スクリーンに映し出された子どもたちを前に、学生は笑顔でゆっくりハッキリ演じ切りました。子どもたちも自分たちの動きに合わせて反応してくれる大学生の姿に興奮状態で、スクリーン越しながら、非常に密度の濃い交流時間を持つことができました。

終演後の学生の感想では「いいものを作るためには意見をお互いに本音で言い合うことが大事だと思った」「子どもたちが笑顔で見てくれて感動した」「どうしても子どもたちに伝えたいという気持ちが生まれて、自然に演技ができた」など満足度が高いものが多く、深い学びにつながったと考えられます。



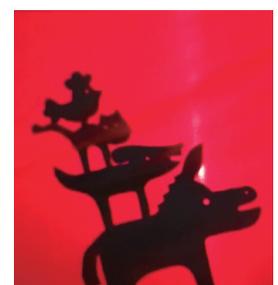
スクリーンを見ながら演技する学生



ソーシャルディスタンスを保ちつつ、画面越しに手遊びを楽しむ子どもたち「龍宮城に行こう!」



マウスシールドをつけての熱演



リモートならではの工夫(影絵の使用)

■ 地域連携型教育プログラムの実績

おもしろい、しっかり学べる、字がうまくなる

書道コース学生団体OSJ橘の動画版書道プログラム

文学部日本語日本文学科書道コース学生

「OSJ 橘」の活動

多くの人に書のすばらしさを知ってもらいたい、書の魅力を直に感じている学生たちの熱い思いが活動の原動力となり、2019年度に書道コースの有志が地域の子どもたちに向けて書道教室を開講しました。当初は生徒集めに苦労していましたが、努力が徐々に実り、少しずつ生徒も集まりだしました。定期的（月2回）に活動するうちに、さまざまな問題点や課題が出てきましたが、その度にメンバー同士で相談し対策を練り、乗り越えてやっと軌道に乗りはじめました。

コロナ禍での活動

OSJ 橘のメンバーは大学にも通えず、先が見えないまま緊急事態宣言下で自粛の日々、せっかく書道を楽しみにしてくれていた生徒のみなさんとも会えなくなり、不安な日常が長く続きました。そんな中、OSJ 橘としての活動がしたい、何かできないかと声が上ががり、メンバーが考えたのが動画版書道プログラムです。せっかく苦労して立ち上げた OSJ 橘の活動をこのような災禍で終わらせたくない、絶対に負けない、という強い思いを持ったメンバーが立ち上がりました。書道は対面での指導が最善であることは身をもって理解していましたが、学生同士で知恵を出し合っ、対面での指導に負けない動画を作ろうと意気込みました。小学生が楽しんで学べる映像を作るためにはたくさん問題点や苦労がありましたが、マスコットキャラクターのぬいぐるみを手作りして出演させるなど、課題に応じた解決策を柔軟に考えてきました。納得のいく出来になるまで撮り直しを重ね、編集作業でもたくさんの工夫をおりませ、完成に至りました。

取り組みの成果と今後の展望

この動画制作を通して多くを学びました。対面では簡単に伝わることも、動画配信では手間がかかり難しいこと、対面で普通に学べたことが如何に尊いことであったかを痛感しました。しかし、与えられた環境の中で精一杯の工夫をすれば対面では気が付かなかったことが見つかることも知りました。そして配信を行う度に、早く生徒のみなさんと会ってお習字がしたい、山科区民ギャラリーで展覧会がしたい、と思いは募っていきました。人と人とのつながりが如何に大切かを改めて感じる機会となりました。

このような経験は、これからの書道人生に必ず生きてくるものだと思います。活動を知りメンバー入りした後輩たちと共に、今後も継続的に開講していきたいと考えています。今を生きる学生が、その経験を生かして地域の文化貢献の一助となる活動として、より大きく発展していくことを願っています。

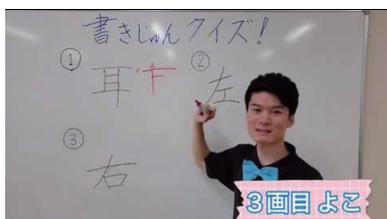
OSJは「おもしろい、しっかり学べる、字がうまくなる」の略。これは受講者のためだけではなく、活動している学生のためでもある名前。その活動を大いに楽しんで、多くを学ぶことのできる活動であると確信しています。



メンバー集合写真



撮影準備の様子



動画の様子

https://www.tachibana-u.ac.jp/research_area/news/2021/01/osj-igramosj-tachibana.html

「教えて！かく先生！！」視聴用 URL

■ 地域連携型教育プログラムの実績

コロナ禍の中での地域連携を考える

げん kids ★応援隊「リモートお化け屋敷」の取り組み

発達教育学部児童教育学会有志

「リモートお化け屋敷」の概要

げん kids ★応援隊の地域連携活動として、勸修小学校の保護者組織である「勸修おやじの会」といっしょに、毎年7月に夏祭り・キャンプを企画し運営してきました。ところが、2020年度はコロナ禍の影響で中止が決定したので、「リモートお化け屋敷」の動画を YouTube を使って配信しました。

取り組みのねらいと経緯

夏祭り・キャンプが中止になって残念がる子どもたちのために、夏の楽しい思い出をつくるというのが、「リモートお化け屋敷」のねらいでした。一番苦労したのが、子どもたちにお化け屋敷の怖さがどのようにすれば伝わるかでした。「勸修おやじの会」の方と協議を重ね、7月中旬ごろから動画の撮影日の設定や機材の買い出しを行いました。8月に入ってから、動画内でも怖さが伝わるような効果音やBGMを考えたり、カメラワークを確認したりして、勸修小学校内での撮影を開始しました。お化け屋敷以外にも、運動場でキャンプファイヤーも撮影しました。撮影した動画は編集を重ね、YouTube にて配信しました。アップした動画は、勸修小学校の全児童数 420 人に対して 750 回以上の再生回数がありました。

取り組みの成果と今後の展望

「リモートお化け屋敷」の動画を YouTube で配信することで、今までつながりを持てなかった地域の子どもたちともつながることができ、学生たちは、この活動を通して、子どもたちと直接会うことができなくても「つながる」ことができることを学びました。

また、この活動を、本学主催の地域連携活動発表会「学まちチャレンジ報告 2020with コロナ」で、オンラインで発表を行い、学内に向けても情報を発信しました。「伝える」ことを意識してパワーポイントの作成や話し方などの工夫を行いました。こういった経験が今後の糧になると思います。

げん kids ★応援隊は、この経験を活かして、今後の活動の幅を広げていくイメージをつかむことがことができました。たとえば、手遊び・ダンスなどのアクティブ系の動画を配信すれば親子で楽しんでもらうことができます。また、クリスマスカードなど、季節を感じることができる“もの作り”を紹介すれば、家庭で制作してもらうことができます。動画を使って子どもたちといっしょに楽しむ活動を広げていく可能性が出てきました。今後の活動に注目してください！



企画の練り上げ



機材の製作



キャンプファイヤー

■ 地域連携型教育プログラムの実績

文通で山科を元気に！

やましの WA ～心のこもった文通プロジェクト～

現代ビジネス学会まちづくり研究会

『やましの WA ～心のこもった文通プロジェクト～』の概要

令和2年度山科“きずな”支援事業の採択を受けて、現代ビジネス学部所属する学生が組織する「まちづくり研究会」が、文通を用いて新型コロナウイルス感染症により失われた山科地域の住民同士の交流促進を目的としたプロジェクトを実施しました。

文通を楽しく行ってもらうために山科地域のキャラクター「もてなすくん」をデザインした切手付きハガキやハガキに貼ってもらうための「もてなすくん」シール、本プロジェクトで伝えたいメッセージを書いた趣旨文などをセットにして、山科地域に500部を配布しました。主な配布先は、山科区役所や山科青少年活動センター、三条街道商店会、大宅小学校などです。

また、学生と一緒に文通用の絵ハガキを作るワークショップを大宅小学校と山科青少年活動センターにて実施しました。

新型コロナウイルス感染症によって失われた「人のつながり」を取り戻す

新型コロナウイルス感染症の影響で、地域住民が交流するイベントや会合などが中止される中、コロナ禍でも何かまちづくり活動ができないかという学生の話し合いから、山科地域における住民の交流減少を切り口に、会わなくても質の高いコミュニケーションが取れる手段である文通に注目しました。

近年では、メールや電話など簡単にコミュニケーションを図る方法もありますが、自らの手で文字や絵をかき、大切な人に手紙を送る文化の良さを再認識してもらい、山科地域で文通が行き交う習慣を作り出したいという思いからこのプロジェクトが生まれました。

学生の学び

学生たちは、対面での十分な打ち合わせができない中で、オンライン会議ツールなどを用いて現状にあった対策を行いながら柔軟に会議を進行しました。

また、プロジェクトの効果などを分析し、本学主催の地域連携活動発表会「学まちチャレンジ報告 2020 with コロナ」や大学コンソーシアム京都主催の「第16回京都から発信する政策研究交流大会」に活動報告を発表し、情報発信を行いました。

本取り組みを通して、新型コロナウイルス感染症によって山科地域がどのような影響を受けたかを調査し、地域に必要なものとは何かについて考えることができました。学生が企画立案から競争的資金の獲得、報告書の作成、今後の展開などを主体的に考え運営し、一貫したプロジェクトマネジメントを学ぶ機会になりました。



もてなすくん切手とシール



山科区役所に文通キットを設置



大宅小学校文通 WS の様子



地域連携活動発表会「学まちチャレンジ報告 2020 with コロナ」の様子



山科青少年活動センター文通 WS の様子

■ 地域連携型教育プログラムの実績

コロナ禍での教育の発展

世界の人々を対象とした健康教育動画の配信

看護学部看護学科学生

COVID-19 に奪われた学習の場

看護学部では、本来4回生のゼミ単位（4名～6名）ごとに、授業の一環で地域住民を対象に健康教育を実施していました。しかし今年度はCOVID-19の感染拡大防止の目的で地域での活動を中止せざるを得なくなりました。学生の学習の場を模索していた時、今まさに世界中の人々が感染症に怯えた生活をしていることに改めて気が付きました。そこで入学時から学んできた感染予防行動の知識を、動画を用いて世界に発信することにしました。

主体性を延ばすシンプルな課題の提示

学生にオリエンテーションで以下の内容だけを説明し、制作する動画のテーマ等を検討してもらいました。

<p>誰に？ 高齢者での、妊婦でも、学生でも、全人類でも、</p> <p>どうやって？ YouTube</p> <p>何を？ 新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・作成した動画は全て大学HPにもリンクを張ります。 ・看護学部の学生の活動としてUPされます。 ・発信の責任を担保するために看護学部の学生がゼミ教員の監督のもと作成したことを必ず映像内に加えてください。 ・長さや映像技術など問いません。 ・対象は世界中の人です。 ・日本語と英語でタイトル・ハッシュタグ・キャプションを入れてください。
---	--

取り組んだ健康教育のテーマ

新しい生活様式	ゼミ名	タイトル
1、一人ひとりの基本的感染予防対策	河原ゼミ	看護学生が伝えたい！マスクの正しいつけ方、外し方、捨て方
	松本ゼミ	意外と知らない手指消毒
	岡田ゼミ	消毒液と感染予防対策
	奈良間ゼミ	ちゃんと手洗いできるかな？
2、日常生活を営む上での基本的な生活様式	中橋ゼミ	生活リズムの整え方
	長尾ゼミ	骨密度をあげよう！
	餅田ゼミ	新型コロナウイルス感染症予防のための室内の換気方法
	黒瀧ゼミ	ブルーライトとの付き合い方
	神崎ゼミ	子どものいる家庭の消毒方法
	伊藤ゼミ	小学生向け！マスクをつけながらの熱中症対策
	小西ゼミ	アーサーきょうだいとホフラキン
3、日常生活の各場面の生活様式	堀ゼミ	たけしと学ぼう！ソーシャルディスタンス
	常田ゼミ	おうちでできるマタニティヨガ
	マルティネスゼミ	買い物の際の7つのポイント
	奥野ゼミ	看護学生が伝える！！食事における感染予防
	竹下ゼミ	外国料理で免疫アップ
	征矢野ゼミ	高齢者の方へ～感染を予防する買い物の工夫～
4、働き方	清水ゼミ	妊婦さんと家族の移動
	石井ゼミ	看護学生によるリモートワーク疲れ解消法 嘘をついている人狼は誰だ！？
	野島ゼミ	お家で簡単！腰痛予防～リモート疲れを癒そう～
	川村ゼミ	新しいキャンパスライフ

<https://www.tachibana-u.ac.jp/coronavirus-info/2020/08/post-1026.html>

1か月の間に21本の健康教育動画が完成しました。



動画「ちゃんと手洗いできるかな？」



動画「看護学生が伝えたい！マスクの正しいつけ方、外し方、捨て方」

取り組んだ成果

当初、ゼミ教員からは、動画の編集テクニックなどに戸惑いの声がありましたが、デジタルネイティブの学生たちはテーマの話し合いや、撮影、編集、キャプションなどのほぼ全てをオンラインでのやり取りで作り上げました。また普段の動画視聴の経験を活かし、画面構成、動画の時間、タイトルの付け方などを工夫し、地域住民が動画を視聴して理解しやすい内容を意識して制作しました。今回のようにCOVID-19の影響は様々な場面で出ていますが、学習方法の多様性を見出すことができ、また学生が自ら学ぶ姿勢を育てる機会になったのではないかと思います。

■ 地域連携型教育プログラムの実績

調査データを「まちづくり」に活かす

イオンタウン山科榎辻での来店者調査活動

健康科学部心理学科学生

「まちづくり」に必要なデータを提供する

健康科学部心理学科では、3回生配当科目として「マーケティング調査演習」を開講しています。心理学は実証的研究分野ですが、この科目は調査法などの方法論を使って消費者の行動を把握し、データを分析することで企業がすすめるマーケティングへの活用方法を体験的に修得するという実践的な授業です。心理学科での勉学を卒業後の職務遂行に結びつけるための視点とスキルを養うという点で重要な科目となっています。このような実践の場として店舗のニーズに応えるための活動を続けています。

2020年度の成果・実績

今年度はイオンタウン株式会社との連携・協力に関する協定に基づき、イオンタウン山科榎辻において来店者調査を実施しました。具体的な授業のスケジュールと内容は以下の通りです。

9月～10月 ①マーケティング調査（来店者調査・来街者調査）の目的、方法、意義について過去のケースを踏まえて学習

11月 ①調査計画の立案と調査項目の作成、面接調査のトレーニング、②イオンタウン山科榎辻での調査実施

12月～1月 ①調査データの整理（コーディングと入力）、②統計分析ソフトウェアによるデータ分析、③調査報告会の準備

11月21日にイオンタウン山科榎辻1階入り口付近において、来店者計107名の方の面接調査を行いました。面接調査の内容は①対象者の来店形態や来店目的など、②店内での立ち寄り箇所と購買品目、③店舗の長所・短所や希望するサービスなどでした。

成果を広く人々に伝える

成果報告のために2021年2月19日に本学においてイオンタウン株式会社の方々、各店舗の方々、学内の担当者、受講学生、担当教員を含めた学科教員が出席して報告会を開催しました。

報告会ではデータに基づいてお客様の意向について説明を行いました。また、結果をふまえて学生が考えたより良い店舗作りのためのプランを提示しました。店舗の皆さまからの質問が相次ぎ、それらに対して学生達は丁寧かつ確に回答をしていました。終了後にとっても意義のある調査報告であったと評価をいただきました。

本調査の意義

調査報告会を通して学生達は店舗経営の維持のためにどのような情報が必要で、それをどのように活用して課題を解決すべきかについて学びました。店舗における品揃えやサービスの向上は店舗の利益だけではなく、地域に住む利用者が利便性や恩恵を得ることになり、広い意味での地域貢献につながります。この点も含めて今回の授業の中で得た様々な経験は今後の職業人としての能力育成に生かされるものと確信します。

今後は全体の結果をまとめた調査報告書を作成し、イオンタウン株式会社および店舗に提出します。さらに情報収集の要請があった場合にはそれに応えるための調査を次年度以降にも行っていく予定です。



調査協力の依頼



調査の様子



報告会の様子

■ 地域連携型教育プログラムの実績

地下鉄を明るく魅力的に!～京都のまちづくり

駅ナカアートプロジェクト2020への参加

現代ビジネス学部都市環境デザイン学科 河野良平ゼミ

駅ナカアートプロジェクトとは

駅ナカアートプロジェクトは京都市交通局が主催するアートプロジェクトです。産官学が連携・協力して地下鉄の駅をより魅力的な空間とし、京都のまちづくりに寄与することを目的としています。京都市内にある芸術・デザイン系の12の大学と短期大学が参加し、各大学の最寄り駅や関係の深い駅にアート作品を展示することで駅のイメージアップを図り、駅と周辺地域の活性化につなげようとしています。本学からは現代ビジネス学部都市環境デザイン学科・河野ゼミの2回生約20名が参加し、制作した作品を京都市営地下鉄・柳辻駅の構内に設置しました。展示期間は例年3月下旬から5月末までですが、今年度は各大学の制作状況に違いが出たため、本学の作品は3月下旬から10月末まで7ヶ月以上の展示となりました。

本学のテーマ

今年の全体テーマは「アートのあふれる駅」で、地下鉄の駅にありがちな「暗い」、「殺風景」、「寂しい」といったイメージを払拭すべく、アートやデザインの力で駅空間を明るく心地よいものとするを旨としました。本学のテーマは「橘の木」としましたが、テーマ選びには苦勞がありました。なぜなら、20名以上のメンバーがいるため、1つのテーマに絞るのが非常に難しかったからです。そこで、本学の名前にある「橘」に注目し、常緑で生命力の溢れる橘の木の様子を作品に表現することで意見が一致しました。

制作過程と取り組みの成果

作品の全体の大きさは幅約3.6m、高さ約2.7mですが、これは同じ大きさ(1.8×0.9m)の6枚のボードで構成されています。インターネットで検索した多くの画像の中から我々が橘らしいと感じたものを選び出し、それをプロジェクターで壁面に映し出して大まかな下書きをしました。次に6つの班に分かれ、各班で元の画像を見ながら実や葉の部分にマスキングテープを貼っていきました。テープを小さくちぎって貼る作業が大変でしたが、近くで見ると様々なマスキングテープの貼り合わせだったものが、遠くから見ると大きな1つの絵になっているところがポイントです。最後に、マスキングテープの上からキラキラした細かなラメを混ぜた透明のレジンをし込んで仕上げました。今年はコロナの影響で設置場所を十分に検討できなかったことと、想定以上に展示期間が長期化したことで作品が反り返ってしまい何度も修復するという苦勞がありました。この活動において学生は、班ごとに分かれて制作を進める中、最終的には全体の図柄が連続して見えるように連携を取りながら作品を仕上げるといったチームワークの大切さを学びました。力を合わせて制作した作品は、シンプルで力強く京都橘大学らしい元気で活力のある作品になったと思います。



画像を壁面に映して下書きしているところ



仕上げにレジンをし込み込む



教員による設置状況



完成写真

■ 地域連携型教育プログラムの実績

山科の歴史遺産を身近に

栂辻駅「アートロードなぎつじ」に中臣遺跡出土土器を展示

文学部歴史遺産学科考古学コース×京都市考古資料館
×公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

アートロードなぎつじとは

京都市営地下鉄・栂辻駅コンコースに設置された「アートロードなぎつじ」は、山科区民の作品を展示するアートのスペースとして、区民の創作活動や芸術活動を支援し、また、駅を利用する多くの人が日常的に豊かな文化に触れる場として、山科区役所によって提供されています。

本学の取り組み

歴史遺産学科考古学コースでは、授業や実習を通して古墳を現地で調査し、出土遺物を手にとって観察・分析するという研究に取り組んでいます。そして、京都橘大学のある山科区の遺跡についても、教員・学生ともに関心をもって調べてきました。そうした中で「山科区の遺跡や遺物について学んだ成果を発表し、地域の方々に山科の歴史遺産を身近に感じていただきたい」という思いが高まり、昨年度より京都市考古資料館に相談し、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の協力を得て、「アートロードなぎつじ」への考古資料展示をともに準備してきました。

そして、2020年7月から2021年3月まで、山科区屈指の遺跡である中臣遺跡で発掘された古墳より出土した須恵器を、「アートロードなぎつじ」で展示しました。

中臣遺跡出土土器の展示にむけて

この展示のスタッフは、考古学コース教員と3回生、大学院生の総勢12名です。考古学コースの3回生が中心となり、歴史遺産学演習・実習の一環として、展示品の選定、解説パネルの作成、展示アレンジなどに取り組まれました。学生の中には将来、文化財の専門職や学芸員を目指す学生がおり、充実した実地訓練の場となりました。

また、展示準備にあたっては、新型コロナウイルス感染症の拡大を防ぐため、学生はMicrosoft Teamsをもちいたオンライン実習で打ち合わせを重ね、パネルの作成などに挑戦しました。「展示品を見やすくするためにケース奥に色付き模造紙をはるう」、「オープンキャンパスの時に、高校生にみていただきたいので、高校日本史の教科書も展示しよう」などといった工夫もしました。なお感染対策のため、展示作業は、本学文学部歴史遺産学科の中久保辰夫准教授と京都市考古資料館の担当者が行いました。

本取り組みの成果

このようにして、「アートロードなぎつじ」での展示活動を通じて、歴史遺産を学ぶ学生は展示実務を体得し、実践的に学びを深めることができました。今後も、山科区の歴史遺産に関する調査と研究を進め、学びを通じた成果を地域の方々や駅を利用する多くの人々に発信していきたいと思えます。



学生が制作したパネル



展示の様子



展示資料の趣旨

■ 地域連携型教育プログラムの実績

オンラインで開催！学生の地域連携活動発表会

学まちチャレンジ報告 2020 with コロナの開催

京都橘大学学生団体×京都薬科大学学生団体

学まちチャレンジ報告 2020 with コロナとは？

本学では毎年、地域での「学び」の形やその成果を全学で共有することを目的として、全学科参加による地域連携活動発表会「学まち AWARD」を開催してきました。2020年度は新型コロナウイルスの影響でほとんどの地域連携活動を中止せざるを得ない状況となりましたが、いくつかの学生グループはこの状況でもできる活動の形を考え取り組んできました。そこで今年度は彼らの活動を報告する場として、オンライン報告会「学まちチャレンジ報告 2020 with コロナ」を開催しました。また、同じ山科区内にあり、京都市の助成事業「学まち連携大学」促進事業で本学の連携大学である京都薬科大学からも1グループが参加してくれました。

各グループの発表内容

発表した4グループとテーマは以下の通りです。

【京都橘大学】

- ◆げん kids ★応援隊「リモートお化け屋敷」
- ◆まちづくり研究会「コロナ禍のまちづくり活動」
- ◆OSJ 橘「教えて！ OSJ！～コロナ禍での活動～」

【京都薬科大学】

- ◆「Pharmatching（ファーマッチング）しておくれやす☆」活動報告

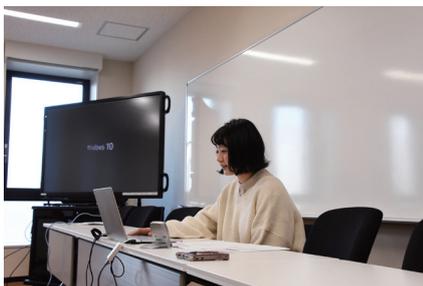
各団体約10分間で、活動の成果発表を行いました。本学発表団体は、コロナ禍で工夫して行ったそれぞれの活動について報告しました。（本実績集 P.9、P.10、P.11 参照）京都薬科大学からは、コンテストにおいて、ICTを活用して気軽にかかりつけ薬剤師に相談できる新サービス「Pharmatching（ファーマッチング）」の提案を行った報告があり、4団体それぞれの特徴がよく表れた発表会となりました。発表の様子はZoomでの配信のほか、本学響友館食堂ほか学内の4か所にてライブ配信されました。発表者はパワーポイントを用いて工夫を凝らしながら発表し、各学科の特徴を活かした活動の学びや魅力をお互いに発見し合いました。

開催を終えて

発表した学生からは、「見やすく伝わりやすいパワーポイント作りを心がけた」「コロナ禍で、メンバー全員で発表準備をするのが大変だった。でも他団体がそれぞれの協力先とどのように連携して活動しているかを知れたので参加してよかった」「他団体の発表を聴いて、オンラインでできる活動に多様な形があると気づくことができた」との声があがりました。

多くの学生・教職員が視聴し、コロナ禍であっても変化を正しく見極めて柔軟に活動する学生たちから刺激を受ける貴重な機会となりました。

本学では今後も、地域連携活動の推進を通して、学生の「地域の課題解決に貢献したい」というアイデアを応援していきます。



げん kids ★ 応援隊の発表の様子



岡田知弘地域連携センター長による奨励賞の授与



発表した京都橘大学の3団体と教職員

2020 京都橘大学
「地域連携型教育プログラム」実績集
(2020年4月～2021年3月)

発行日 2021年3月31日

発行 京都橘大学 地域連携センター

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

TEL : 075-574-4342 FAX : 075-574-4149

URL : <https://www.tachibana-u.ac.jp/>

E-mail : aca-ext@tachibana-u.ac.jp



変化を楽しむ人であれ

京都橘大学